

長野県 きのこと病害虫データベース (菌茸部)

【主な掲載項目】

エノキタケ	<u>桃色かび立枯病</u> <u>黒腐細菌病</u> <u>わたかび病</u> <u>菌床トリコデルマ病</u> <u>トビモンナミキノコバエ</u> <u>クロバネキノコバエ科</u>
ブナシメジ	<u>わたかび病</u> <u>菌床トリコデルマ病</u> <u>ヤマタナミキノコバエ</u> <u>クロバネキノコバエ科</u> <u>ダニ類</u>

エノキタケ

桃色かび立枯病

<病徴と診断>

エノキタケ子実体の芽出し前後に、菌床面に淡い桃色の胞子を多数生産し、芽出し不良を起こす。接種から生育前期までに感染すると、罹病株として被害が確認される。接種時など、早い時期に感染するほど被害は大きい。本病はエノキタケ黒腐細菌病との併発が多くみられる。本病菌の分離には、RBC 培地または RM3 培地を用いる (<https://www.agries-nagano.jp/research/genre03>)。被害ビンから釣菌したり、栽培施設において落下菌や付着菌を採取し、培養後にコロニーを観察して診断する。

<発病条件>

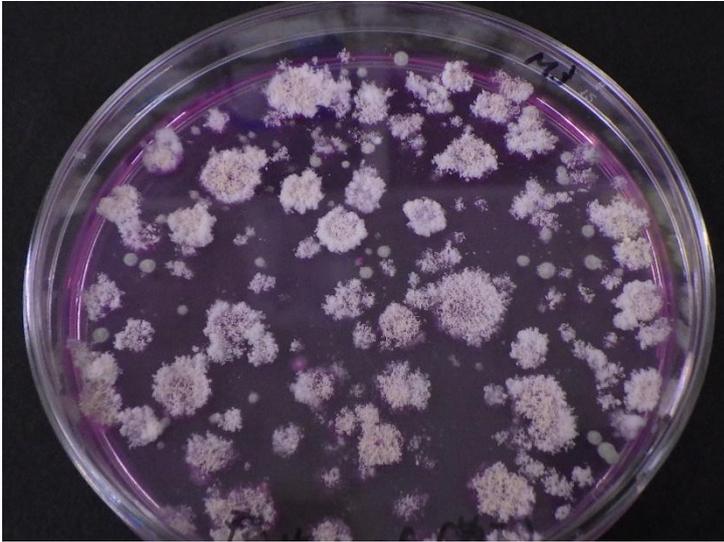
本病は、糸状菌のスピセルム・ロゼウムが原因菌である。春～初夏にかけての比較的温かい季節に被害が多いが、栽培施設内では通年で生存すると考えられる。胞子が飛散しやすいため、接種室等での空気感染、菌かき機・巻紙からの接触による感染で被害が拡大し、施設全体が汚染されると考えられる。

<防除方法>

1. 詰め場等での粉塵飛散防止対策
2. 菌かき機刃の除菌、巻紙の洗浄等
3. 被害ビン・株の抜き取り直ちに殺菌処分
4. 施設内の清掃および除菌



桃色かび立枯病（菌床面の被害）



RM3 培地による桃色かび立枯病菌の検出（落下菌）

エノキタケ

黒腐細菌病

<病徴と診断>

主にエノキタケの子実体を侵す。芽出し以降に黒いアメ状の液体が菌床に発生して株元等を黒く腐らせる。本病菌の分離には、黒腐細菌病菌選択培地 TSM-10 培地を用いる

(<https://www.agries-nagano.jp/research/genre03>)。被害株から組織分離するか、栽培施設において付着菌や汚染水を採取し、TSM-10 培地で培養後、特徴的なコロニーを観察する。選択培地による診断が難しい場合は、培地に生じたコロニーをエノキタケに接種する「簡易病原性検定法」により病原性の有無を確認できる。

<発病条件>

本病は、細菌のシュードモナス・トラシーが原因菌である。低温でも生育できる細菌であるため、エノキタケ栽培施設の環境に適応性が高い。きのこ施設では一般的な細菌であり、栽培施設の床にある、きのこ培地の残渣、溜水等で生存している。加湿器の霧や結露水等の水由来で感染するケースが多い。また、菌かき機による伝染・拡大事例も多く、汚染した菌かき水も発生を助長させる。

<防除方法>

1. 冷却器、加湿器等の定期的な点検、清掃
2. 菌かき機刃の除菌
3. 被害ビン・株の抜き取り直ちに殺菌処分
4. 施設内の清掃および除菌



エノキタケ黒腐細菌病



エノキタケ黒腐細菌病



TSM10 培地上の *Pseudomonas tolaasii* のコロニー

エノキタケ

わたかび病

<病徴と診断>

エノキタケ生育中に子実体の株元から白い菌糸が厚く覆い、子実体を溶かし、やがて萎れて最後は枯死する。接種から生育前期までに感染すると、子実体への被害が大きい。菌糸、胞子ともに白いため、エノキタケでは特に発見が遅れがちとなり、注意が必要である。本病菌の分離には、わたかび病菌選択培地 RM3 培地を用いる (<https://www.agries-nagano.jp/research/genre03>)。被害ビンから釣菌するか、栽培施設において落下菌や付着菌を採取し、20℃で培養し、培養後コロニーを観察し診断する。

<発病条件>

本病は、糸状菌のクラドボトリウム・バリウムが原因菌である。低温性の糸状菌であり、エノキタケ生育室でも繁殖し、胞子が飛散する。そのため、冬～初春にかけての寒い季節の被害が多い。子実体にわた状の菌糸が発生するころには胞子が多量に飛散し、それらが施設全体を汚染して被害が拡大する。接種室等での空気感染、菌かき機や巻紙からの接触による感染、収穫時等の被害株への接触で胞子が飛散し、被害を拡大させる。

<防除方法>

1. 被害ビン・株の抜き取り直ちに殺菌処分
2. 菌かき機刃の除菌、巻紙の洗浄等
3. 被害株への接触による胞子飛散対策（作業者の専任等）
4. 詰め場等での粉塵飛散防止対策
5. 施設内の清掃および除菌



エノキタケわたかび病の病徴



エノキタケわたかび病の病徴（拡大）



エノキタケわたかび病（芽出し時の被害）



RM3 培地によるわたかび病菌の検出（落下菌）



RM3 培地によるわたかび病菌の検出（拭き取り）

エノキタケ

菌床トリコデルマ病

<病徴と診断>

トリコデルマ属菌による病害で、培養中にきのこ菌糸を侵食する。はじめは白色の菌糸が繁殖（ダニの媒介による被害では小型コロニーが多数出現）し、白色の粉を吹いたような塊を生じる。塊は徐々に色づき、菌床全体に蔓延して培養ビン内が緑色になる。桃色、茶色を呈するトリコデルマ菌も存在する。本病による被害は培養ビン内が緑色になるため、比較的発見しやすい。ただしエノキタケでは培養日数が短いため、培養ビンが緑色を呈する前に菌かきに至る場合もある。培養ビンの着色に気付かず菌かきを行うと、被害が拡大してしまう。本病菌の分離には、RBC 培地または RM3 培地を用いる

(<https://www.agries-nagano.jp/research/genre03>)。本病菌の分離は、被害ビンの菌叢から直接トリコデルマ菌を釣菌するか、栽培施設の疑汚染場所から拭き取り採取した試料を用いて、上記の培地に画線等する。25°Cで培養後、特徴的なコロニーを観察し、さらに顕微鏡観察して本病害であるか診断する。

<発病条件>

本病は、糸状菌のトリコデルマ属菌が原因菌である。胞子の空中浮遊率は低く、被害発生の要因はダニ等の微小動物による媒介や、人やモノに付着した原因菌の侵入である。初夏～晩夏にかけての暑い季節の被害報告が多い。この季節はダニ類等の活動が活発となる時期と重なるので、被害が拡大しやすい。培養時の被害ビンを見落としてそのまま菌かきをしてしまうと、菌かき機による大規模な二次的感染が生じることがある。

<防除方法>

1. 被害ビン・株の抜き取り。抜き取り後は直ちに殺菌処分
2. ダニ等微小動物の侵入防止対策
3. 菌かき機刃の除菌等
4. 施設内外の消毒槽の設置等（靴裏等の除菌）
5. 施設内の清掃および除菌



菌床トリコデルマ病（菌床面の被害）



菌床トリコデルマ病（芽出し直後の被害）



RM3 培地における菌床トリコデルマ病菌のコロニー

エノキタケ

トビモンナミキノコバエ

<病徴と診断>

成虫は体長5mm程度で、やや不明瞭な斑紋が2つある透明な羽とトゲのある長い足、長い触角を持つ。脚は黄色であり、足先は褐色である。幼虫の体長は7～9mm、12節の体節から成り、側面に8つの気門がある。頭部は黒色で発達した口吻があり、きのこ組織をかみくだき、穴をあける。成虫はエノキタケの芽出し期に産卵し、15℃前後では羽化するが、5℃では生育が遅れるか、羽化しない。長野県では1980年代後半からエノキタケで被害が報告されている。近年、大分県で被害が報告されているイシハラナミキノコバエと形態が酷似しており、同種もしくは非常に近い種類と推測される。

<発生条件>

成虫が芽出し室（期）に室内に侵入し、産卵することで、子実体への食害が生じる。しかし、エノキタケは芽出し完了後、5℃前後まで室温を下げるため、数mmの幼虫か蛹の状態で発見されることが多い。

<防除方法>

エノキタケで防除対策を重点的に行うのは芽出し室（期）である。特に冬季に芽出し室・生育室の扉を開けての換気、作業中に扉を開けたままにすることは避ける。

・侵入防止対策

吸排気口、換気扇、排水口への侵入防止ネットの設置や不要な場合は塞ぐ
隙間をコーキング材などで塞ぐ

・施設周辺の整備（生息場所を作らない）

施設周辺にきのこクズや廃菌床などを放置しない
草刈り、外に不要な物は置かない

・侵入後の捕虫

捕虫機や粘着シートを芽出し室（期）に設置する

以上の対策をキノコバエが発生する時期（春と秋）に必ず実施し、定期的に施設周辺の点検を行う。生育室内に設置した捕虫機も定期的に動作確認を行い、粘着シートはキノコバエが野外で発生している時期は最低、1か月に1回は交換して侵入の有無を確認する。

・捕獲消長の確認

施設周辺の捕獲消長を把握したい場合は、生育室の吸排気口、施設の換気扇、きのこクズ置き場などに粘着シートを設置し、定期的に捕獲調査を行う。

エノキタケ

クロバネキノコバエ科

<病徴と診断>

菌床栽培で発生するクロバネキノコバエには、ツクリタケクロバネキノコバエ(写真4)、チビ(チバ)クロバネキノコバエなどが報告されている。チバクロバネとチビクロバネは別種として扱われていたが、近年の研究では同種と扱われることが多くなった。日本産のクロバネキノコバエ科は21属113種の記録があるが、実際はこの10~20倍の種がいると推測されており、分類は非常に難しい。また、未成熟期(幼虫)の形態については研究が非常に少なく、幼虫による同定は不可能とされている。

成虫の体長が2~5mmの小さなハエで、全体が黒っぽい色をしており、2枚の羽は透明~暗色透明で、頭部には糸状の長い触角を持つ。この仲間の1種の飼育例では、1世代が18日前後(20~30℃)である。卵は楕円形で淡い色をしており、菌床に産みつけられる。幼虫は体長3~8mm、体色が透明~黄色で、菌床に穴を掘って菌糸を食する。キチン質の頑丈な口吻を持ち、きのこ組織を食い破り、穿孔することもある。10日程度で簡単な繭を作り蛹になる。繭を作る場所は外界に近い菌床内や種菌上である。蛹は数日で成虫になる。

<発病条件>

エノキタケは培養日数が短いので、害菌汚染ビンが散発的に増加したり、菌かき時に外したキャップや菌床面に幼虫や蛹を発見することで、その侵入に気づくことが多い。培養室内で繁殖が繰り返されることはまれである。

菌かきの前に抜き取った汚染ビンを、施設内に放置すると成虫が出てきて、培養室内に侵入することがある。芽出し室(期)では幼虫が成長することは可能であるが、抑制以降は5℃前後まで室温を下げるため、成長が止まり、数mmの幼虫か蛹の状態が発見されることが多い。

<防除方法>

- ・培養室の吸排気口への侵入防止ネットの設置、隙間を埋める
- ・培養室入り口にエアー(ビニール)カーテンを設置し、成虫の侵入を防ぐ
- ・割れビン・破損キャップの処分、キャップのウレタンフィルターの交換
- ・害菌汚染ビンの抜き取り徹底
- ・培養室に捕虫機の設置
- ・汚染ビンを生育室や菌かき機周辺に放置しない
- ・施設周辺に廃菌床、割れビン等を放置しない
- ・生息場所となる、施設周辺の雑草は定期的に草刈りする 等を定期的に実施する。



エノキタケ培養ビン内で成長した幼虫



ツクリタケクロバネキノコバエの成虫 (右：雄 左：雌)

ブナシメジ

わたかび病

<病徴と診断>

ブナシメジ生育中に子実体の株元から白い菌糸が厚く覆い、子実体を溶かし、やがて萎れて最後は枯死する。接種から生育前期までに感染すると、子実体への被害が大きい。エノキタケほど被害株の発見が難しくないが、胞子は飛散するため注意が必要である。本病菌の分離には、わたかび病菌選択培地 RM3 培地を用いる (<https://www.agries-nagano.jp/research/genre03>)。被害ビンからの釣菌または栽培施設からの落下菌、付着菌を採取し、20℃で培養し、培養後コロニーを観察し診断する。

<発病条件>

本病は、糸状菌のクラドボトリウム・バリウムが原因菌である。低温性の糸状菌であり、冬～初春にかけての寒い季節の被害報告が多い。子実体にわた状の菌糸が発生するころには、胞子が飛散し、施設全体を汚染して被害が拡大する。接種室等での空気感染、菌かき機からの接触による感染、また、収穫時等の被害株への接触で胞子が飛散し、被害を拡大させると考えられる。

<防除方法>

1. 被害ビン・株の抜き取り直ちに殺菌処分
2. 菌かき機刃の除菌等。
3. 被害株への接触による胞子飛散対策（作業者の専任等）
4. 詰め場等での粉塵飛散防止対策。
5. 施設内の清掃および除菌。



ブナシメジわたかび病



ブナシメジわたかび病（被害部を拡大）

ブナシメジ

菌床トリコデルマ病

<病徴と診断>

トリコデルマ属菌による病害で、培養中にきのこ菌糸を侵食する。はじめは白色の菌糸が繁殖（ダニの媒介による被害では小型コロニーが多数出現）し、白色の粉を吹いたような塊を生じる。塊は徐々に色づき、菌床全体に蔓延して培養ビン内が緑色になる。桃色、茶色を呈するトリコデルマ菌も存在する。本病による被害は、培養期間の長いブナシメジでは培養ビン内が緑色になるため、比較的発見しやすい。培養ビンの着色に気付かずに菌かきを行うと、被害が拡大してしまう。本病菌の分離には、RBC 培地または RM3 培地を用いる (<https://www.agries-nagano.jp/research/genre03>)。分離は、被害ビンの菌叢から直接トリコデルマ菌を釣菌するか、栽培施設の疑汚染場所から拭き取り採取した試料を用いて、上記の培地に画線等する。25°Cで培養後、特徴的なコロニーを観察し、さらに顕微鏡観察して本病害であるか診断する。

<発病条件>

本病は、糸状菌のトリコデルマ属菌が原因菌である。胞子の空中浮遊率は低く、被害発生の要因はダニ等の微小動物による媒介や、人やモノに付着した原因菌の侵入である。初夏～晩夏はダニ類が活発に活動する時期であり、この時期に被害報告が多い。ブナシメジは培養期間が長いため、ダニが次々と培養ビンを移る（接種～10 日前後）ことで重大な被害に繋がりがやすい。

<防除方法>

1. 被害ビン・株の抜き取り。抜き取り後は直ちに殺菌処分
2. ダニ等微小動物の侵入防止対策
3. 菌かき機刃の除菌等
4. 施設内外の消毒槽の設置等（靴裏等の除菌）
5. 施設内の清掃および除菌



トリコデルマ属菌による芽出し不良



菌床トリコデルマ病の被害ビン

ブナシメジ

ヤマタナミキノコバエ

<病徴と診断>

平成 19 年に長野県内のブナシメジ生産施設で、子実体を食害するキノコバエ科のハエの 1 種として発見された。トビモンナミキノコバエと形態が酷似するが、やや大型で羽の斑紋が明瞭な場合が多い。ブナシメジ生育室（15℃、90%以上）でブナシメジ菌床面に産卵させ飼育すると、産卵からふ化は 2～3 日、幼虫の期間が 10 日前後で終齢幼虫は 1 cm 程度まで成長する。蛹化から羽化までの期間は 9 日前後であり、産卵から 22 日ほどで羽化する。成虫は砂糖水を餌とした場合、ブナシメジ生育室（15℃、90%以上）の環境下で 15～23 日生存した。低温で飼育すると生存日数は伸び、5℃で飼育した個体は平均 57 日（最長 78 日）生存した。低温に強く、成虫のまま越冬することも可能であることが示唆される。

<発生条件>

人工飼育では、産卵は菌かき後の菌床面から子実体のヒダや柄の隙間などで観察されたが、現地での被害事例は収穫期から包装後に幼虫が子実体外へ這い出す事例が多く、菌膜形成～受光期（原基形成）までに産卵されることが多いと推測される。

<防除方法>

以下の対策を、キノコバエが発生する時期（春と秋）に必ず実施し、定期的に施設周辺の点検を行う。生育室内に設置した捕虫機も定期的に動作確認を行い、粘着シートはキノコバエが野外で発生している時期は、最低 1 か月に 1 回は交換して侵入の有無を確認する。

・侵入防止対策

吸排気口、換気扇、排水口への侵入防止ネットの設置や不要な場合は塞ぐ隙間をコーキング材などで塞ぐ

・施設周辺の整備（生息場所を作らない）

施設周辺にきのこクズや廃菌床などを放置しない
草刈り、外に不要な物は置かない

・侵入後の捕虫

捕虫機や粘着シートを生育室に設置する

・捕獲消長の確認

施設周辺の捕獲消長を把握したい場合は、生育室の吸排気口、施設の換気扇、きのこクズ置き場などに粘着シートを設置し、定期的に捕獲調査を行う。



ヤマトナミキノコバエ成虫



ヤマトナミキノコバエ幼虫



ブナシメジへの食害跡

ブナシメジ

クロバネキノコバエ科

<病徴と診断>

菌床栽培で発生するクロバネキノコバエには、ツクリタケクロバネキノコバエ(写真4)、チビ(チバ)クロバネキノコバエなどが報告されている。チバクロバネとチビクロバネは別種として扱われていたが、近年の研究では同種と扱われることが多くなった。日本産のクロバネキノコバエ科は21属113種の記録があるが、実際はこの10~20倍の種がいると推測されており、分類は非常に難しい。また、未成熟期(幼虫)の形態については研究が非常に少なく、幼虫による同定は不可能とされている。

成虫の体長が2~5mmの小さなハエで、全体が黒っぽい色をしており、2枚の羽は透明~暗色透明で、頭部には糸状の長い触角を持つ。この仲間の1種の飼育例では、1世代が18日前後(20~30℃)である。卵は楕円形で淡い色をしており、菌床に産みつけられる。幼虫は体長3~8mm、体色が透明~黄色で、菌床に穴を掘って菌糸を食する。キチン質の頑丈な口吻を持ち、きのこ組織を食い破り、穿孔することもある。10日程度で簡単な繭を作り蛹になる。繭を作る場所は外界に近い菌床内や種菌上である。蛹は数日で成虫になる。

<発病条件>

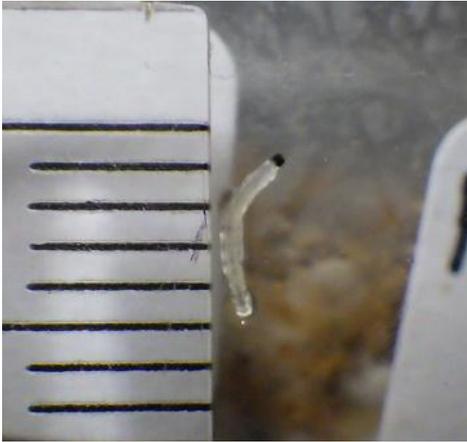
深刻な被害は培養ビン内への侵入と害菌汚染の拡大である。培養期間が長いブナシメジでは培養ビン内で羽化した成虫が他の培養ビンへと移動して、害菌汚染を広げ、培養室内で繁殖を繰り返すことで、害菌被害が拡大しやすい。侵入される培養ビンの多くは割れているか(特に底面)、破損キャップやキャップフィルターが古くなり収縮した不良ビンがほとんどである。培養日数の短いエノキタケやヒラタケの場合、菌かき時に外したキャップや菌床面に幼虫や蛹を発見することで、その侵入に気づくことが多い。

菌かきの前に抜き取った汚染ビンを、菌かき機や生育室周辺に放置すると成虫が出てきて、生育室内の菌かき後ビンの菌床面や生育の遅いビンに産卵する。また、ブナシメジ生育室棚のコケ(ヤノウエノアカゴケ等)や汚れた壁や床などでも繁殖が確認されているので、生育室の定期的な洗浄は必須である。

<防除方法>

- ・培養室の吸排気口への侵入防止ネットの設置、隙間を埋める
- ・培養室入り口にエア(ビニール)カーテンを設置し、成虫の侵入を防ぐ
- ・割れビン・破損キャップの処分、キャップのウレタンフィルターの交換
- ・害菌汚染ビンの抜き取り徹底
- ・培養室に捕虫機の設置
- ・種菌量の確認(特にブナシメジ) ※菌床面とキャップ間に隙間があると産卵されやすい

- ・汚染ビンを生育室や菌かき機周辺に放置しない
- ・施設周辺に廃菌床、割れビン等を放置しない
- ・生息場所となる、施設周辺の雑草は定期的に草刈りする 等を定期的を実施する。



クロバネキノコバエの幼虫



ツクリタケクロバネキノコバエの成虫（右：雄 左：雌）

ブナシメジ

ケナガコナダニ

<病徴と診断>

コナダニ科の中でもケナガコナダニ属がブナシメジ等のビン栽培やマイタケ、シイタケの袋栽培、マッシュルームで被害が報告されている。

体長は雌が0.4~0.5mm、雄が0.3~0.4mmである。足は4対あり、胴体後部の周縁から発する6対の著しく長い毛がある。体の色は乳白色である。

生活史は、7~10日で卵から成虫になり、交尾後1~2日で産卵を開始し、300個以上の卵を産む(25~28°C)。低温には強いが熱に弱く、50°Cの直接接触なら平均1.4秒で致死することが報告されている。移動速度は13.3秒/cm(調査9個体の平均値)であり、22分で約1mを移動することが可能である。

<発病条件>

ブナシメジ培地内の栄養材に誘引されて侵入しているものと考えられる。ダニが侵入することで、ダニによる食害とビン内に持ち込んだ害菌(特にトリコデルマ属菌)の繁殖が問題となる。温度や栄養条件の違いでダニの生育には差がみられるが、ビン内で何世代か回転し幾何級数的に増殖する。ビンから這い出した個体は、新たに近くのビンに侵入し、被害を拡大させる。ブナシメジの菌糸が伸長した後は、ダニが侵入しても培地内でダニが大繁殖することは少なく、接種から2週間前後の培養管理が最も重要となる。

<防除方法>

ダニを発生させないためには日々の発生防止対策が重要となる。

- ・接種~10日間前後の培養ビンへの侵入防止を徹底する
- ・木製パレットより樹脂製パレット(PPなど)を認める。使用前に殺菌釜の余熱で加熱処理や洗浄・天日乾燥を行い、殺菌・殺虫処理してから培養室に入れる。
- ・割れビン・破損キャップの処分を徹底する
- ・培養中の害菌汚染ビンは殺菌処理後に掻き出しする
- ・キャップのウレタンフィルターを定期交換する
- ・培養室は定期的に清掃する
- ・可能なら害菌汚染やダニの被害の無い、初期培養室を設ける
- ・空調機の故障等で空気循環が悪く、温湿度ムラがあると増殖しやすいので、室内全体の空気の流れを調整する
- ・施設内へのダニや害菌に汚染された空気や人の侵入を防止し、汚染物を培養室に持ち込まない
- ・作業によって作業着を使い分ける

- ・培養室に入室する際は履物を除菌槽で除菌するか、専用の内履きなどに履きかえる
- ・鳥、ネズミ、ハエなどのダニの媒介者となる生物の侵入防止も徹底する

ダニが原因と思われる害菌汚染が発生した場合は次の対策を実施する。

- ・害菌汚染の原因と思われるダニの種類を同定する
(汚染ビンの検鏡かダニトラップを培養室内に設置する)
- ・害菌汚染ビンは1か月以内に抜き取り、殺菌処理後に掻き出す
(ダニは接種後40日~50日以上経過するとビンから這い出してくる)
- ・汚染した培養室への入室は、作業の最後とし、被害を広げない
- ・接種~10日日前後の培養ビンへの侵入防止を徹底する
 - ①害菌汚染の無い初期培養室の設置
 - ②マルチ(ビニールラップ)被覆による物理的な侵入防止対策
- ・部屋を空にした後、清掃(掃除機等)→洗浄→乾燥後に次亜塩素酸ナトリウム、オゾン処理等で除菌する(ダニの餌をなくす)
- ・定期的にダニトラップを設置してビンの抜き取り本数と一緒に培養室のダニの消長も確認する



ケナガコナダニ

ヒナダニ科

<病徴と診断>

このグループについては研究が進んでおらず、サジボウヒナダニ以外の種名は明らかとなっていない。ブナシメジで度々、被害が発生するが、ナメコ、エノキタケ、マッシュルーム栽培でも被害が報告されている。土壌中や動物糞の表面、昆虫の体表などでも生育し、コナダニ科と同様に多くのきのこの菌糸を食害する。トリコデルマ属菌の菌糸や胞子を好み、害菌を培地内に運び、大きな被害を与える。食性はケナガコナダニ属ほど広くない。この仲間の日本国内の分布は不明であるが、きのこ栽培では各地で発生していると考えられる。大きさは0.2~0.3mmで、個体が集合した時の色はオレンジ色~赤褐色である。

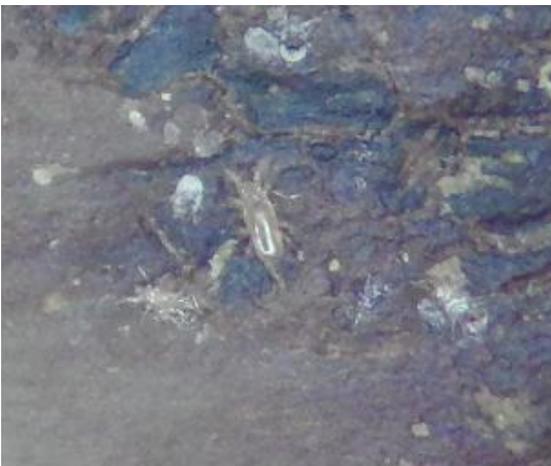
<発病条件>

ケナガコナダニ同様に、培地内の栄養材に誘引されて侵入すると考えられる。ダニが侵入することで、食害とビン内に持ち込んだ害菌(特にトリコデルマ属菌)の繁殖が問題となる。培養初期に侵入すると被害が甚大となる。培養日数の長いブナシメジ、ナメコなどでは害菌汚染ビンからあふれ出したヒナダニ成虫が床につもり、掃き集めるとバケツ一杯になった事例もある。ブナシメジの菌糸が伸長した後は、ダニが侵入しても培地内でダニが大繁殖することが少ないため、接種から2週間前後の培養管理が最も重要となる。

本種は自走も可能であるが、小型のダニなので、空中をホコリの様に浮遊して被害が拡大する。

<防除方法>

防除対策の基本は、ケナガコナダニと同じであるが、動物性の有機物を好むので、鳥やネズミ、昆虫が施設内に生息していると被害が発生するリスクが高くなる



サジボウヒナダニ

ホコリダニ科

<病徴と診断>

体長は0.2mmより小さく、体表には光沢があり、白色のものとやや褐色を呈するものがある（写真7）。雌と雄とで形態が異なり、雌は脚部がコナダニやヒナダニと異なる。このため自走能力は他のダニより劣り、主に風に乗って浮遊・落下して移動する。キノコバエ等に付着して移動している可能性もある。

<発病条件>

食性はケナガコナダニ属ほど広くなく、栄養材やトリコデルマ属菌などを好む。乾燥条件に対してはコナダニ科より抵抗力がある。一見して害菌汚染の被害がないブナシメジ培養室でもキャップの裏などにひっそりと生息しており、ダニ以外の要因で害菌汚染が増加したり培養環境が悪化すると、被害が顕著化することがある。

<防除方法>

防除対策の基本は、他のダニと同様であるが、特に培養室内の空気循環によって拡散するので、マルチ（ビニールラップ）被覆による物理的な侵入防止対策は効果が高い。



ホコリダニ



トリコデルマ属菌叢中のホコリダニ